

迎古夢旅 4577 : イベリア半島・探訪の動機 P116

竜飛岬を見て、大西洋の海を思い出して、急遽、割り込み。

そして、いろいろなことが思い浮かんだ。

8月16日、お盆。 祇園祭も鞍馬の火祭も中止。年中行事がないと、なぜか、寂しい。

お墓まいり。私も人生の節目。親父殿のことが、脳裏に登場した次第。

1968年の**親父殿の「欧州日記」**を取り出した。

イベリア半島訪問の顛末は、一部後述。いい時代だったのか、運のいい親父殿だった。

下記は、私のメモ書き。少し不鮮明だが、右は、ポルトガル語の勉強のため、

最小限、挨拶や、食事の注文できるように、

大阪から、フランス経由、ポルトガル・リスボン到着まで時間は、たっぷり、機中泊のメモ。

左の二番目に「**親父殿の納骨が終わり、人生を考える時、**

ポルトガル探訪は、何が見つかるか、楽しみである」とメモっている。

今の自分にとって、今回のひとり旅は、人恋しく、寂しく感じてしまうのではないか、

とも、メモっている。下記は、私の旅立ちのメモの一部。

○ 今、自分とて 今、一人旅は
人恋しく、寂しく感じてしまうのではないかと。

○ 親父殿の納骨が終り、人生を考える時
ポルトガル探訪は、何が見つかるか、楽しみである。

○ ビールは、お刺身、酒、肉、魚、今、終りに
ポルトガルは、何が探訪の目的地か、今、思っている。

○ 常に、探訪の精神で、探訪する。大切。
素直な人、話の面白い、旅の楽しみ、旅の成果。

○ 旅の一日、近頃は、とて、笑って、中々、いい
時節を、大抵、探訪して、これ、いい。

○ Sopa

Canja 鶏肉の湯汁 (和食)
Sopa à Alentejana 豚肉の湯汁 (和食)
Caldo verde 緑豆の湯汁 (和食)
Sopa de Agrião 魚の湯汁
Sopa de Camarão かにの湯汁
Sopa de Cabeça 肉の湯汁
Sopa de Cozido 肉の湯汁
Sopa de Espingarda 肉の湯汁
Sopa de Lagrimas 涙の湯汁
Sopa de Peixe 魚の湯汁
Sopa de Tomate トマトの湯汁
Creme de Marisco 魚の湯汁

Assado 焼肉
Cozido 湯汁
Frito 揚げ物

Vinho Vinho

Vinho Verde 緑酒
Dão 白葡萄酒
Algarve 白葡萄酒
Maderia 白葡萄酒

Seco 白葡萄酒
Doce 白葡萄酒
Tinto 赤葡萄酒
 Branco 白葡萄酒

旅立ちの前、スペインの話題が出て、一度訪ねたいとの思いが、
無意識に、潜在意識もあったのだろう、意識して、イベリア半島に、注目した。
歴史を、紐解くと、イベリア半島の歴史が、興味深く、面白い。
どっぷりと、イベリア半島に滞在するのも面白いかも。ビザは、90 日間が最長だった。
当時、私も忙しかったが、2ヶ月の時間をとった。

先人の所業、歴史、資料に、偶然、出会って、イベリア半島の歴史や概略を頭に入れた。

親父殿の足跡だけは、ぜひ、訪ねたいとっていた。と、いうのも、

どんな旅をしたのか、その興味と、特別の思いがあった。

文章だけではわからない。どんなところで、宿泊して、何を見て、何を感じて、

欧州日誌を書いたのか、当時、親父殿の背中を見ている。

学生時代、歴史が好きだったので、ただし、ヨーロッパ史は、勉強不足だったが、
スペイン艦隊や、冒険家の名前は、覚えている。

時代が前後するが、ポルトガル・スペインの探検家たち、エンリケ航海王子、マゼランや、

1469年、ヴァスコ・ダ・ガマ、喜望峰経由、インド到達。

1492年、コロンブスのアメリカ大陸到達。

18世紀末まで、イベリア半島、ピレネー以北は、未知同然だったらしい。

二つのことが、この状況を変えたとある。

ひとつは、新聞で、ナポレオン戦争の状況を、日々追う形で、

ヨーロッパ人は、イベリアの地名に、親しんで行った。

今一つは、起りつつあったロマン主義運動が、遠い異国としての
イベリアの魅力^{あお}を煽り立てたらしい。この時期、初めて、ポルトガル・スペインを訪ねた
人物の一人が**バイロン**。1809年、イベリアの随所を巡り歩いたと、記述にある。

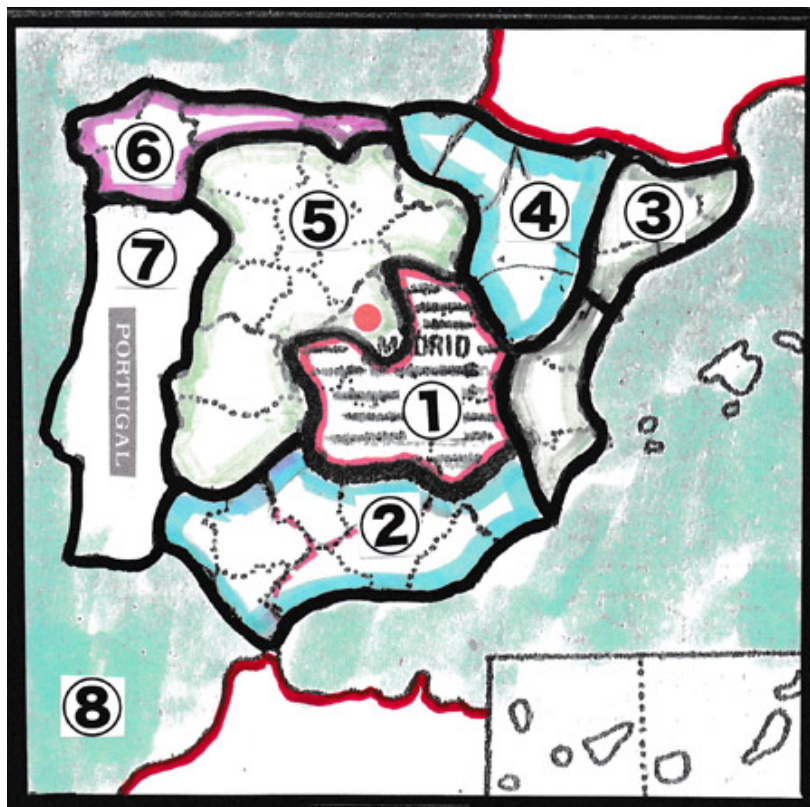
バイロンはイギリス人、長編詩「ドン・ファン」

モーツァルトのオペラ「**ドン・ジョヴァンニ**」を生んだことでも有名。

イギリス人のバイロン。今一人のイベリア半島訪問者は、
米国の作家・ワシントン・アーヴィング。1822年、セビージャの米国領事館勤務になり、
イスラム時代のアンダルシーアに傾倒し、伝説と物語を集めた
「アルファンブラ物語」を著した。

さらに、プロスペル・メリメも、スペインのロマン主義小説に着想を得て
「カルメン」を、**発表**したとある。しかし、イベリアの魅力を、ごく身近な形で、
一般の旅行者に紹介したのは、**イギリスの作家・リチャード・フォード**だったと資料にある。

セビージャとグラナダに住み、この間、**馬に乗って**、
スペインの各地を訪ね、膨大なメモによって書かれ、スケッチまで添えられた
「**スペイン旅行案内**」は、その詳細で、役に立つ内容と、
読んで楽しい文章のおかげで、たちまち、**ベストセラー**になったと。



欧州日誌は、22日間。BK退職後、一時期、この会社の役員に、

ドイツ・ケルンの国際カメラ展示会の視察旅行。

この旅の、一応、少人数の団長として参加したと書いている。したがって、細かくメモして、

視察報告が必要だったので、記録していたのではないか。

しかし、この「欧州日記」は、個人的なもので、私には、興味深く、当時を知る資料。

お盆でもあり、関係もあり、リスボンの記述を、次に、ご紹介する次第。

ポルトガル・リスボンへは、イギリス・ロンドンから入国。

私は三男坊。反発したが、一番よく似ていると言われたこともある。今は、懐かしい。

親父殿に似ているとか、今、似たようなことをしている自分。

お盆なので、親父殿を偲んで、書かせてもらった。今は、親父殿に感謝。

お墓まいりをしてこようと思っている。と同時に、未来につづく、今が大切な時期。

心新たに、心身健康最優先。今に全力投球。頑張りたい。

